

青森県のイタヤ細工

—青森県諸職民俗調査から—

青森県立郷土館 成 田 敏

I は じ め に

青森県立郷土館では、昭和63年度から平成元年度の2カ年にわたり、青森県諸職民俗調査を行った¹⁾。これは、本県の人々が生活するために使用してきた伝統的な「もの」を製作したり、加工したりする技術者（職人）について調査したものである。この調査の中で青森県の特徴ある事例として「イタヤ細工」を取り上げてみたい。

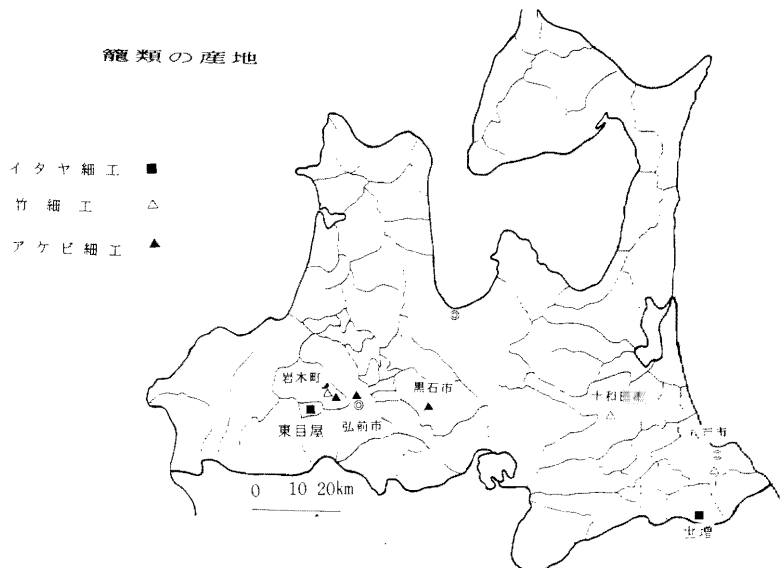
日本の庶民の生活に使用されてきた様々なカゴ類は竹で編まれたものが多くみられるが、青森県には編むのに適した竹の種類が少なく、そのため竹以外の材料でもカゴが作られた。

青森県内で地竹といえば根曲り竹（和名チシマザサ）であり、細くて強いのが特徴である。県内の竹細工は中津軽郡岩木町愛宕地区を中心にこの根曲り竹を用いて主としてリングの手カゴを作っている。

竹以外の材料としてアケビ、ヤマブドウ、クズなどの蔓がよく用いられている。特に、アケビ細工は一時期（大正時代がピーク）県の有力な産業のひとつといえるほど生産が伸び、製品は海外にまで輸出されていた²⁾。

蔓のほかにはイタヤが用いられた。イタヤカエデという木をテーブル状に削り、これでカゴなどを編むという独特な技術が本県には2カ所現存した。

II 生 産 地



生産地のひとつは南部地方の三戸郡南郷村の世増（よまさり）地区で、もうひとつは津軽地方の弘前市東目屋地区である。調査はこの2カ所についてもおこなわれた⁹¹。南郷村世増は新井田川沿いに山に入った岩手県境近くにある戸数27戸、人口116人（昭和62年調査実施時）の集落である。しかし、世増は隣の畑内地区及び岩手県軽米町水吉地区とともに世増ダムに水没するため、現在全ての家を取り壊され、ここに居住していた人達は既に他の地区に移転している。

世増にイタヤ細工がいつごろから始まったのかは不明である。ここの古い家筋である法霊崎家には次のような言伝えがある。

「法霊崎家は、もともと旅人を世話する宿であった。7代目の当主が旅人の持っていた蔓のコダシ（背負い袋）を見て、これはいいものだということで、一晩のうちに作り方を教わった。その後、当主が蔓で作ってみたがうまくいかない。苦心の末、イタヤカエデでカゴを作ってみるとうまくいった。すると、いいものを作ったということで部落の人々が習うようになり、部落全体に広がった。あまりにも良いものだから他へは知らせたくないという部落の話合いがなされ、世増だけの技術として現在まで続いてきた。」

世増では、かつて冬期間にイタヤ細工を副業として盛んに行った。そして、作った物を背負って遠方まで行商して歩いたものであった。そのため、世増では他の部落と違って出稼ぎに行かなくてもよかったという。

自動車が普及せず、交通機関もまだ不便だった頃はカゴや箕を背負い、近在はもちろん、県内の五戸、三本木（現十和田市）、七戸、乙供（現東北町）等の上北地方を中心に行商を行った。中には北海道の函館まで行った人もあったという。

小さいコシカゴだと50個くらい、普通のカゴだと10～20個、箕になると8枚を背負って行った。また、同時に簡単な材料と道具を持ち、箕の修理も行った。普通の旅館に宿泊することもあったが、修理を行う農家によく宿をとったもので、修理代が宿泊代となった。上北地方だと5～6日かけて回るのが普通であった。行商は第二次大戦後まもなくまでよく行われたが、以後次第に少なくなった。

近在の場合、三戸の朝市へ売りに行くこともあった。三戸までは6里程であったので、晩飯を食べてから荷を背負って出かけ、三戸近くになると寝て夜の明けるのを待ったものだという。カゴを20個くらいつけて自転車で三戸まで行った人もいた。

今は、カゴ類の需用が少なくなり、あまり作られなくなったが、50才すぎの大部分の人達はその技術を有している。幼い頃から父や部落の人達のイタヤ細工を見よう見まねで覚えていった。

もう一カ所の生産地である弘前市東目屋地区は弘前市街地から岩木川沿いに西に入った山間地にある。昭和30年に弘前市と合併し、現在、市の飛地になっている地区である。

ここのイタヤ細工もはっきりした来歴は知られていない。調査に協力していただいた三上秀五郎氏（弘前市中畑字和泉・大正10年生）はイタヤ細工を伝えてきた四代目にあたり、初代の長三郎は秋田方面の人から技術を学んだと伝えられている。現在でも秋田県北部の角館ではイタヤ細

工が行われている。このあたりから技術が伝播してきたものとも考えられる。

III 材 料

世増の場合、イタヤカエデの木は付近の山でもよくとれた。山林地主の許可を得て伐採し、地主への謝礼は、後で製作したカゴを2～3個納めるくらいのものであった。世増の全戸で盛んにイタヤ細工をやったころは、秋に岩手県の種市、大野、伊保内などに買い付けに行った。生木で1年分の材料を買い、馬車を頼んで運んだ。

イタヤの丸太はあまり太いとよく裂けない（割れない）、ので径3寸より少し細いのが望ましい。丸太を一定の長さに玉切りにするが、カゴの大きさによって異なった。大型のカゴだと5尺5寸、ショイカゴだと4尺3寸、サ克蘭ボ取穫用のカゴは3尺3寸～4寸、小型のコシカゴだと2尺2～3寸くらいであった。

これをナタとチョウナで8等分くらいに割り、扇形の材にとる。木の芯に近い部分（サネ）をとり去り角材にするが、この幅もカゴの種類によって1寸5分、1寸、5分のものを用意していた。角にした材は凍らないよう火棚の上にあげて水気をとった。凍ると硬くなって裂けにくくなるという。

東目屋の場合は、イタヤカエデをさらに奥地の西目屋の方から購入している。

イタヤカエデ以外の材として、カゴの縁に取り付けるミズナラその他の雑木、箕の縁に取り付ける根曲り竹（チシマザサ）、ホウノキ他、箕を作るときイタヤと一緒に編み込むフジがある。

IV 製 法

世増におけるカゴの製作法は次のようである。

カゴを編む前に、角材に小刀で切れ目を入れ、口で裂いて細いテープ状の材を作る。これをツラモノと呼ぶ。裂くときは木目に沿って行すが、目の荒い方が良材である。裂いたものは小刀で表裏を削り、仕上げをかける。仕上げをかけることをシラゲルと呼ぶ。午前中に150本ほど仕上げをかけ、午後にカゴを3個くらいあむというのが標準的な1日の作業であった。

イタヤ細工のカゴの大きさは編むための材料（ツラモノ）の本数であらわす。最小が42本で、大きくなる毎に8本ずつ殖え、50本、58本、66本・・・というように定まっている。

世増でのカゴの編み方は、その分類からいうと網代（アジロ）編みになる。これをここでは「2本ハネ」と呼んでいる。底の方から徐々に編み込み、口縁部までくるとミズナラなどの棒を芯として入れ、丈夫に仕上げる。

世増では、箕は現在ほとんど製作されていない。箕の大きさは口の幅で3尺9寸であるが、以前のものはもっと大きく4尺2寸であった。箕は、カゴ類とは編み方、材料が異なり、横にイタヤを入れ、縦にフジを入れて編む。縁にはコンゴノキ（和名不明）やホウノキを用いた。東目屋ではこれに根曲がり竹（和名 チシマザサ）を用いる。他の材料、製作法は両地区に関してほぼ

同様である。

V 製 品

イタヤ細工の製品は、現在南郷村世増では注文があったときにだけ、サクランボを採取するときのカゴやリングもぎ、キノコとりの背負いカゴを主に作っている（調査時）。しかし、以前には水汲み用のバケツ、針カゴ、ツヅラ、箕、エンツコ、さらにはランドセルまで作ったという。

弘前市東目屋では箕とジョウゴだけを作ってきたようである。ジョウゴは俵に米などを入れるときに使う道具である。製品は世増と同じく農閑期の冬に作りためておいたものを津軽地方一円に売り歩いた。当時はよく売れたので、冬だけでは生産が間に合わず、夏期に夜なべ作業もして作ったものだといわれている。現在は世増同様、店からの注文があったときにだけ作っている。

東目屋でカゴが作られなかった理由は明確でないが、付近の岩木町愛宕（あたご）にリングの手カゴを主とした竹製（根曲り竹）のカゴの産地があるのと関わりがあるとも思われる。つまり、カゴに関しては岩木町、箕は東目屋という産地の色分けがなされていたという推測もなされる。なお、世増の付近には有力な竹カゴの産地は見あたらない。三八地方のカゴは現在岩手県から入ってきているようである。

また、両者の製品に共通してみられる箕は農業に欠かせない農具で、どんな農家にも一つか二つはあったものである¹。今度の調査で南部地方一円で使用されていた箕は大部分が世増産のもので、津軽地方一円の箕は東目屋産のものだったということが裏付けられたといえよう。

VI お わ り に

青森県における伝統的なイタヤ細工は現在消滅しかかっているといっても過言ではない。現に生産地の一方であった世増地区は集落の移転に伴い、技術者が離散の状態に陥っており、技術の存続が極めて困難な状況にある。東目屋においても需用の目減りにより、見通しは暗いといえよう。

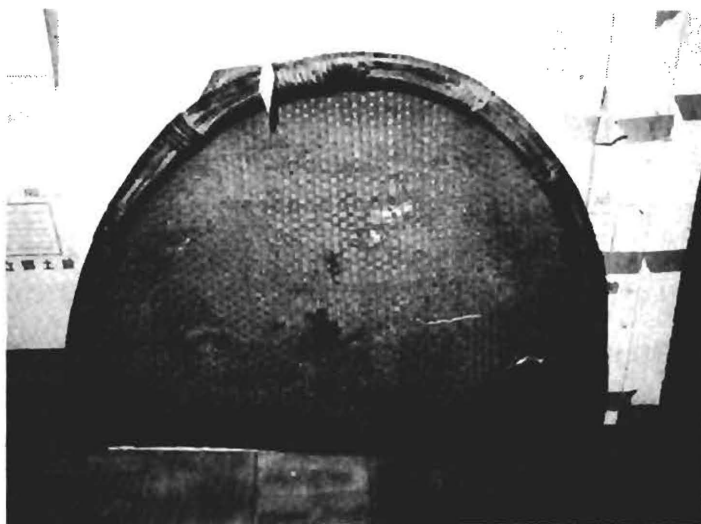
世増の場合、自らの地域内に注目に価する伝統技術があるのに、行政の側からはなんらの指導も保護措置もなかったことが残念である。近年、町・村おこし運動が盛んに行われているが、新しいイベントばかりでなく、もっと地元の伝統的な文化に目を向けるべきではなかろうか。

註

- (1). 『青森県の諸職』（青森県立郷土館編・1990年・青森県教育委員会発行）として報告書が刊行されている。
- (2). この頃のアケビ細工は海外向けのバスケット等がよく作られ、欧米へ輸出された。『青森県統計書』（青森県・明治37年～昭和14年）によると、大正10年に生産のピークを迎え、生産額が209,837円に昇っている。
- (3). 青森県諸職民俗調査にあたって、南郷村世増は橋本芳弘氏に、弘前市東目屋は斎藤彰氏にそ

れぞれ調査を依頼した。本稿はこの二人の報告、並びに筆者の聞き取り調査（昭和62年）をもとにまとめたものである。

(4). 穀物の選別など広い用途を有する農具で、農家の必需品であった。そのため、民俗の各種儀礼に使用されていた。また、箕はかつて山野を漂泊する山窩（サンカ）もしくはそれに類似の人達によって供給されたとされ、民俗学的に極めて注目される民具のひとつである。



かつて世増で製作された 箕



世増で製作されている イタヤの籠